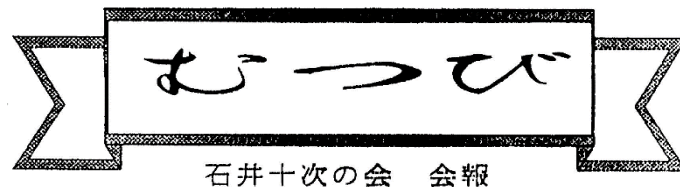


2026 年
(令 8 年)
7 月 9 日



346 号

その日のために

木城町教育委員会 本田 敬

春の華やかな開花を終えたバラは、梅雨から夏にかけてが大切な時期になります。今年も一番花は美しく咲きましたが、五月中旬からぐんと気温が上がったせいか、二番花は満足できる開花にはなりませんでした。また、病気や害虫対策は続けましたが、気づけばハダニの被害も…。十数年続けている趣味のバラ栽培ですが、なかなか思うようにはいきません。それでも休日には庭に出て、除草や防除に励んでいます。すぐに大きな変化は見えなくても、手をかけ続けることで秋の美しい花につながることを知っているからです。

私は現在、木城町の教育委員会で仕事をしています。1 町に 1 校の義務教育学校という環境の中で、子どもたちは異学年で学び合い、地域の方々に支えられながら学校生活を送っています。そうした姿を見ていると、「教育が町の未来をつくる」ということを日々実感します。同時に、その力は授業だけでなく、さまざまな経験や活動を通してより豊かに育まれていくものだと感じています。

今年、特に印象に残っているのは、部活動の地域展開の一環として創設した地域クラブ活動「パフォーマンス部」です。本町にはこれまで運動部しかなく、吹奏楽等の文化的な活動に取り組みたい子どもたちの思いに十分応えられていませんでした。そこで教育委員会から総合型地域スポーツクラブに委託し、吹奏楽やダンス、神楽等を主な活動とする地域クラブ活動を立ち上げることになりました。

創設にあたっては、総合型地域スポーツクラブの眞鍋さんが大変な情熱をもって取り組んでくださいました。講師を探して一緒に関係機関を訪ねたり、人づてに紹介していただ

いた先生にお願いに伺ったりしました。中でも最大の壁は楽器でした。吹奏楽で使用する楽器は非常に高価で、購入は現実的ではありません。貸していただけたところはないか、多くの方々に相談し、最後には近隣の高校が現在使用していない楽器を貸してくださることになりました。

こうして13名の部員による活動がスタートしました。当初は楽器から音を出すだけでも一苦勞でしたが、講師の先生の熱心なご指導のおかげで、子どもたちも活動を心から楽しんでおり、回を重ねるごとに音がそろい始めました。そして5回目ほどの活動では、早くもメロディーらしい演奏が聞こえてくるようになったのです。

直接指導に携わる立場ではありませんが、その音を耳にしたとき、活動を支えてきた一人として大きな喜びを感じました。子どもたちの達成感や高揚感も伝わってきて、改めて、子どもたちの可能性は機会や環境によって大きく広がるのだと実感しました。そして何より、多くの方々の情熱や善意、「子どもたちのために…」という思いが形になったことへの感謝の気持ちでいっぱいになりました。

この経験を通して思い起こしたのが石井十次の実践です。十次は岡山孤児院で楽隊を組織し、音楽を通して子どもたちの成長と自立を支えました。その姿勢の根底には、一人一人の可能性を信じ、その力を引き出そうとする教育への深い信念があったのだと思います。子どもたちの成長はもちろんですが、その成長を支えるために力を尽くしてくださる方々の姿に触れたことも、私にとって大きな学びとなりました。これからも、石井十次の精神に学びながら、自分に何ができるのかを問い続けていきたいと考えています。

今年の夏も暑くなりそうですが、秋バラを楽しみに庭に出てバラの手入れに励みます。パフォーマンス部も、秋には発表の機会をいただけるかもしれません。その日を楽しみに日々の積み重ねを大切にしていきたいです。

「石井十次の会」高鍋木城支部長になって考えること

高鍋木城支部長 財津 吉壽

「石井十次の会」の活動に参加するようになって10年近くになります。それまで私は『ゆうあい通信』の一読者に過ぎませんでしたが、退職を機に高鍋へ帰省し、高鍋藩の歴史やホタルの飼育などを切り口に、地域との関わりを深めてきました。

昨年8月に高鍋木城支部が発足し、私が支部長に就任してから間もなく1年が過ぎようとしています。支部活動としてはまだまだこれからですが、この間、石井十次が歩んだ孤児救済事業の歴史に触れ、また地域との関わりの中で、最近深く考えさせられたことが二つあります。私なりの理解と想いをご紹介しますと思います。

（１）十次を支えた女性たちの存在

十次は「児童福祉の父」として広く知られていますが、その偉大な功績の裏には、重要な役割を果たした女性たちの存在があったことを知りました。幼少期の十次の思想形成を支えた母・乃婦子（のぶこ）、岡山孤児院の創設期を支えた妻・品子、亡き品子の遺志を継いで十次を支えた後妻・辰子、そしてキリスト教を通じて十次の活動を支え続けた炭谷（すみや）小梅などです。

心優しい十次の幼少期の逸話として「縄の帯」の行動が知られていますが、これには乃婦子の影響が非常に大きいと感じます。乃婦子は大変勤勉で慈悲深い母親であり、近所の親子等に古着や衣服を分け与えたりしていました。十次が上阿知の診療所で最初に孤児を引き取った際も、品子はそれをごく自然に受け入れ、時には十次が岡山の孤児院で子どもを叱責する場面でも、優しくとりなしたといひます。

このような心優しい品子が亡くなった後、十次の体調や孤児院を支えたのが、看護師であった辰子の存在です。彼女は十次が亡くなった後も、孤児院長として子どもたちを最後まで面倒見続けました。また、炭谷はキリスト教を通じて長年にわたり、心物両面から孤児院を献身的な支援を行い続けました。今も茶臼原にある十次の墓の横には、炭谷の墓石が静かに並んでいます。

幼少期に乃婦子の生き方から慈愛の心を身に付け、孤児院運営においては妻であり「孤児院の母」でもあった品子や辰子が重要な役割を果たし、さらに事業全体を炭谷が支える――。十次を取り巻くこれら女性の多大な協働なしには、現在の「孤児の父・石井十次」の事業は、成し遂げ得なかったことは間違いなく、また十次もそうさせたい人徳の持ち主であったことも強く感じています。

（２）石井十次の故郷・高鍋は「文教の町」

昔、高鍋の気風を示す「高鍋で学者ぶるな」ということわざ的な言葉がありました。高鍋には、秋月藩の時代から一貫して学問を尊び、武士だけでなく広く庶民にも学問の普及を図ってきた歴史があり、多くの優れた人材を輩出してきました。石井十次もその一人であり、高鍋の馬場原で生まれ、幼少期は明倫堂や島田学校、私塾・晩翠学舎で、先輩・後輩とも議論を重ねながら学んでいたことでしょう。

最近、ある場所で高鍋の「文教の町」としての歴史について話をする機会がありました。その際ある方から「昔は多くの人材を輩出していながら、最近あまり目立った動きが見られないのではないか」という話を聞きました。この話の要旨は、以下のような内容だったと私なりに解釈してみました。

高鍋がこれまでに多くの人材を輩出し、「文教の町」としての礎を築けたのは過去に「明倫堂」という組織（仕組み）があったからではないかと。そして、その中で多くの若者たちが年齢・身分に関係なく切磋琢磨し、鍛え上げられていった結果であり、その伝統が高鍋では継承されてきた結果として、多くの人材を輩出できた。石井十次や三好退蔵、また高鍋四哲といった個人の功績を讃えるとともに、「なぜ高鍋という地から彼らが生まれたのか」という背景にも目を向けるべきではないかという理解になりました。それは、地域全体の「底上げ」につながるのだらうと思えます。

私は、高鍋史友会にも所属し、その中で高鍋歴史を知る機会を多く持ちました。歴史を学ぶことは、それじたい面白いのですが、過去の事実を知識として知る価値は、将来を考える資料にも出来ると理解するようになっていきます。70歳を超えてからの手習いですが、石井十次の会高鍋木城支部の支部活動の中で、地域全体の「底上げ」につながるものを学んでいけたらと思っています。

むつび編集委員としての所感（その1）

むつび編集委員会は、会則に基づき毎月1回会議を開催している。

会議の主な内容は「石井十次の会」会報「むつび通信」に関する企画、依頼、取材、校正、発行などである。むつび通信の円滑な発行の為に、毎月4頁分の原稿を担当者が一字一句ゆっくりと音読する。原稿内容をより深く理解するためのとても有意義な時間だ。

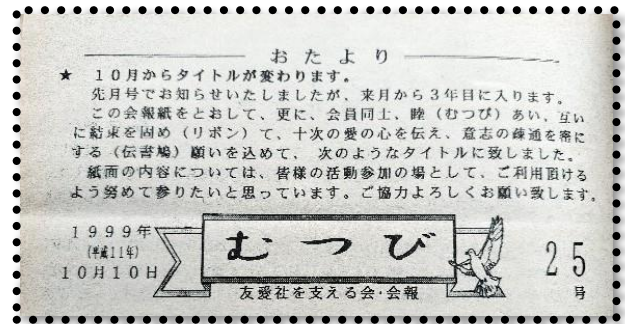
1999年（平成11年）10月10日付けのむつび会報に「会員同士、睦（むつび）あい、互いに結束を固めて（リボン）、十次の愛の心を伝え、意志の疎通を密にする（伝書鳩）願いを込めて」・・・これが「むつび」のタイトルになったとある。

私は2017年のむつび通信の巻頭言に、初めて拙文「忘れられない思い出」を記載させて頂いた。それを読まれた県外の会員の方からお便りが届いた。その後も、県外の石井十次関連新聞記事等を送って下さり、私が執筆する上での参考資料になった。文通は今も継続中である。大変有り難く思っている。

さて、先日の令和8年度石井十次の会総会において「これからは通信費も高くなるのでむつび通信も毎月でなく、隔月（2ヶ月毎）にしてもよいのではないか？」「ネット配信やInstagram等に切り替えてはどうか？」との意見が出された。

これをむつび編集委員としては、とても複雑な思いで聞いていた。（次号へ続く）

むつび編集委員 徳地順子



奨学金選考委員会からのご報告

5月26日令和8年度給付型奨学生の選考委員会を開催致しました。

その結果、継続申請者2名・本年度新規申請者7名、計9名の奨学金給付者を決定致しました。会員の皆様のご支援に感謝申し上げご報告させていただきます。

石井十次の会 奨学金選考委 島埜内 遵

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】深田 勝廣【都城市】横山 真希子 Raycious（レイシヤス） 津貫 恭平【西都市】黒木 亜紀 福島 梨紗【高鍋町】後藤 輝子 ALSOK 宮崎(株)高鍋営業所

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【県外】林 知尚 元田 達徳 渡邊 福【宮崎市】明松 美佳 田中 実喜雄 村田 順子 山口 昇 景山 武純【都城市】西園 康朗【高鍋町】島埜内 遵 (株)あおい会館

※ここまでの掲載者は編集等の都合により6月20日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1

社会福祉法人 石井記念友愛社後援会

石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp

編集後記

- 巻頭言は本田敬氏にいただきました。バラづくりと木城町教委で仕事に邁進する姿とが「その日のために」十次の音楽隊実践と通底していると感じいました。ありがとうございました。

（編集委員 徳地 順子）